

# 小さなカボチャ

新井 宏

終戦直前の昭和二十年春、小学校二年生になった時に、今の新潟県長岡市(旧古志郡)に疎開し、四年間少年時代を過ごした。

最初の一年間は、母の実家の古志郡高島村で世話になったが、父が復員してきてからは、父の長姉の住む古志郡片田村に間借りして、隣村の十日町小学校に通った。食糧難の時代ではあったが、コシヒカリで知られる「米どころ」で、貧しいけれど、ごく平凡な生活を送っていたように思う。

しかし、今の年齢になると、かすかな記憶が無性に懐かしく思い出され、そのひとつひとつが、自分の形成と無関係ではなかったことに気付く。

わずか四年間の疎開生活ではあったが、微妙な訛りから新潟出身者はずぐ判る。書き言葉としては標準語であっても、訛りは別だ。例えば越路吹雪の場合、「愛の賛歌」

の中で「♪ あなたの燃える手で」、「♪ かたく抱きあい、燃える指に髪を」と歌っているが「燃える」の「る」が、まさに越後訛りなのである。

ところが、越路吹雪は、東京麹町生まれで長野県の飯山高等女学校に進んだという。そんなはずはあるまいと多少ムキになって調べてみると、父の転勤で新潟にも住んだことがあるという。そもそも「越路」の名前からして越後ではないか。

標準語の「う」を「う」と「い」の中間で発音すると越後訛りの「う」となる。似ている発音が東北訛りにもあるが、これは標準語の「い」を「う」に発音したもので「新宿、渋谷、品川」を「スンズク、スブヤ、スナガワ」というが如くである。しかし、東北弁は越後訛りと微妙に異なる。似た発音が、韓国語では標準的に使われている。

疎開したばかりの二年生の時は、高島村の小さな小学校だったので「複式授業」で、一年生と一緒に勉強していた。おしやまな一年生の女の子が、調子を付けて教科書をすらすら読むのに、二年生にもなって一文字ずつ拾い読みしている状態で恥ずかしかったことを覚えていて、喜怒哀楽は忘れても、恥ずかしかったことは忘れられない。

父が北支から復員して来たので三年生になる時に、片田村に移り、やや大きな十日町小学校に転校した。最初に貰った教科書は使い古しを墨で塗りつぶしたものであった。時代の変わり目を目撃したが授業のことは何も覚えていない。

おそらく四年生になった時の事だと思うが、校庭の片隅でカボチャを育てていた。食糧難の一助にというのであろうか、児童が手分けして小さな畑を作り野菜を植えていたのだと思う。

ところが、毎日見に行くが、カボチャの実がいつまでたつても大きくならない。濃緑と乳黄白緑、橙色が入り混じった実は、後の知識のカボチャに間違いない。葉も花も間違いなくカボチャであった。

夏休みが終わり、二学期になって、いよいよみんなまで飼っていたうさぎと一緒に野菜類を収穫して、大きな鍋で料理することになった。それでもカボチャは大きくな

らない。

うさぎを捌いたのは担任の女教師だったろうか。当番でうさぎに草を食ませていたので、ちょっとはかわいそうに思ったが、女の子が割烹着を着て、急に大人っぽく料理を手伝っていた。ただ、それだけの記憶のだけけれど、なぜカボチャが大きくならなかったのかずつと気になっていった。

まず思いつくのは、肥料を施した記憶がなかったことである。乾燥した校庭の片隅を耕して作った畑に水をやっていた記憶も無い。他の作物がどうなっていたかも知覚えない。それにしても、韓国の路地に野生するカボチャを見た時、誰が収穫するのだろうかと思つたほど大きく育っていた。もしかしたら、カボチャの種類のためだったのだろうか。

インターネットで調べると、普通のカボチャは一〜二キログラムなのに世界記録は九一〇キログラムだと言う。その記録も昨年一〇五三キログラムに更新された。

食用にはならないが、世界中で大きなカボチャを競う大会がある。ハロウインのシンボルの存在といえは、お化けのカボチャ。日本でも、四〇〇キログラムほどのカボチャが作られている。シンデレラの金の馬車はカボチャの変身である。

一方、小さなカボチャの種類もある。手のひらに乗る

ほどの小さな「黒皮小玉カボチャ」は緑く濃緑で、品種としては「坊ちゃん」とか「小菊」がある。「坊ちゃん」はホクホクとした甘味があり食べやすいサイズで、「小菊」はおもに北陸で栽培されていて、上品な甘味があり日本料理に適しているという。しかし、食糧難の時代にわざわざ小さなカボチャの種を植えたとは思えない。

カボチャは十六世紀中頃カンボジアに寄港したポルトガル船が豊後(大分県)にもたらしたもので、その際「カンボジア」が訛って「かぼちゃ」という名前になったという。しかし正確に言えば、その頃、カンボジアという国名はなかったはずなので、どうも疑わしい。

カンボジアにカンボットという港町があるので、おそらくこれに由来するかと思う。しかし、調べてみると、カンボジアの語源には、もっともらしい説がある。

それは、インドの僧カウンディニヤ(カンブ)がこの地に建てた王国カンブジャ(カンブの子孫の意味)とする説である。カウンディニヤは『梁書』七八八年に(扶南国)王憍陳如閻邪跋摩とある人物だというから時代的に見て、神話の類であろう。それはカンボジアには十世紀から十五世紀に掛けてアンコール・ワットで有名なクメールという強大な王国が存在していたからである。そこに「カンボジア」を示す国名はない。

ムキになって言うほどのことではないが、一昨年、ア

ンコール・ワット等の築造に使われたクメール尺に関する論文を書いた際に、インド、ベトナム、中国との関係をかかなり徹底して調べたことがあるからである。

まあ、語源はともかくとして、原産地は中央アメリカから南アメリカ北部の熱帯地方とされている。

ちょうど、「小さなカボチャ」を育てていた頃だと思いが、同級生に「坊ちゃん」に見える男の子がいた。画が抜群に上手く、特に風景画の秋色表現がすばらしかった。さつさと書き上げた画を見て、なんとか真似て色合いを出そうとするが、写真風の理屈っぽい色になってしまい、画の才能のないことを実感した。画家の息子だと聞いたが、一緒だったのはごく短期間だったように思う。その子も私も「旅(たび)の子」と呼ばれていたもので、都会から疎開して来ていたのである。名前でも記憶していたなら、今頃どこかの画展でその名を見付けたかもしれない。

四年生の頃から、手当たり次第に本を読み始めた。まず『マンガ』の『らくろ』に夢中になった。『のらくろ』、『等兵』とか『のらくろ一等兵』という題名を覚えているので戦前の発行のシリーズである。どこにあったのか知らないが、「軍隊物」なのに厳しくは禁止されていなかったようだ。

黒い野良犬「のらくろ」が、犬の軍隊へ入営して、二等兵から徐々に出世し、最終的に大尉になる物語。昭和六年から「少年倶楽部」に連載され単行本にもなっているが、軍や内務省の評判が芳しくなく、太平洋戦争の始まる昭和十六年には終了している。

それからというものが、手当たり次第に「活字」を読んだ。田舎にも講談本がかなりあり、「真田十勇士」とか「岩見重太郎」「山中鹿之助」「荒木又右衛門」等を、繰り返し、繰り返し読んだ。ルビが振られていたので、小学生でも、とにかく読める。

その頃、村にも「おばさん」が経営する小さな「貸本屋」が出来た。本のない時代なので、戦前の本を集めて開業したのであるが、紙質の悪い本もあったので、戦後の出版物も混じっていた。そこで「ロビンソンクルーソー」と共に「十五少年漂流記」も読んでいる。小学校四年生の冬に出た小出正吾の訳本がもう入っていたものと思われる。

不思議なことに加藤武雄の名前を良く覚えていた。その頃、加藤武雄は少年少女小説を多く書いていたので、「小公子」や「小公女」の流れで、読んでいたのだと思うが、読み終わってしまうと、加藤武雄の本なら手当たり次第に借りてきて読んでいた。しかし、それらはほとんど「恋愛小説」で、大人の世界を覗いて見ても、よくわ

かるはずが無かった。

今では忘れられ去られた加藤武雄ではあるが、かつては菊池寛と並ぶほどの大家家で、膨大な通俗小説を書いて一世を風靡したという。私の住む相模原市の出身で、城山に文学碑があり、門人に佐藤愛子がいる。

加藤武雄の文学碑のある近くまで散歩で遠出することがあるが、その城山を下ると、天折した詩人八木重吉の記念館がある。八木重吉は、武雄の再従兄弟で、重吉の第一詩集「秋の瞳」は武雄の尽力によって出版され、重吉没後にも重吉の妻の登美子の依頼で、詩集の出版を援助している。

登美子は、稀有の人生を送り、夭折した重吉の詩を世に出すため尽力し続け、重吉没後十九年目に万葉歌人吉野秀雄と再婚し、今度は秀雄を支え、九十四歳で平成十一年に世を去った。その縁であろうか、加藤武雄の墓碑は吉野秀雄の筆になっている。秀雄は良寛の研究者でもあり書に秀でていた。

ここまで書いたところで、加藤武雄や八木重吉のことをもう少し詳しく調べてみたくなり、相模原の図書館に出かけた。今では、市の図書館でも、郷里にゆかりの人物については、ある程度までの検索ができる。

そこで、じっくりする本を見つけた。久米準の「堺川を歩こう」である。城山の文学碑近くに源流を持ち、江の島に至る相模川に沿って名所、旧跡、文学碑などを紹

介している。著者の経歴を見ると、間違いなく小学校六年生の時の担任の先生だ。

久米先生に出会ったのは、疎開先から東京に戻った時である。先生はまだ二十歳だったのではなからうか、よれよれの詰襟学生服を着ていた。授業ではしよっちゅう吉川英治の『天兵童子』などを何時間も朗読してくれた。まだ世の中が固まらず規制のゆるい良き時代であった。その中で歴史好きの少年が何人も誕生した。

後のことになるが、久米先生は、小学校四年生以上が使用する地図帳の山、二百四十七山を全て登って『先生の約束―社会科地図帳の日本全山踏破』を上梓し、それが済むと外国の山まで足を伸ばしていた。

疎開先のことに戻る。

田舎の学校ではあったが、五年生の夏休みに宿題が出た。その中に理科もあった。

理科については、もうその頃、天体運動についてかなり読んでいたので、生意気にその解説を書いて提出したが、先生はあまり評価してくれなかった。

ところが、もうひとつのレポート、「ピアノの鍵盤上の赤いフェルトが、黒い筐体に赤く写ることを観察した記録」を激賞してくれたのである。

ちょうど夏休みの最中に、田舎の小学校にもピアノが入ってきた。エナメル塗りの黒く筐体が輝いていた。そ

っと鍵盤カバーを開けると赤いフェルトが敷いてある。それが黒い筐体に赤く写るのである。なぜかその時大発見をした気分であった。校庭に出て、いろいろな色の花や葉っぱを集めてきては写してみる。予想通り元の色が写る。ただ、それだけのことを、大発見のように、書いて提出したのである。

先生から見れば、「当たり前なことを仰々しく」と感じたとはいえないのに、褒めてくれたのである。

ここで、いきなりノーベル賞の話をする。

韓国は昨年もノーベル賞に無縁であった。先進国入りし、科学技術の水準も世界の水準に達していると自負しているのに、いつまで経っても音沙汰ない。隣の日本では既に二十一名もノーベル賞の受賞者がいる上に、昨年は中国育ちの女性がノーベル医学賞を受賞した。

何かにつけて、躁鬱症の韓国である。やたら優越感に浸って威張っていたかと思うと、急に劣等感に陥りシユンとしてしまう。その落差がはげしいのが韓国の特徴であるが、さすがに気づき始めている。最先端の話題の周辺でいくらくたさんの論文を書いても、ノーベル賞の対象にはならない。新しい科学の核となる新発見や新理論は、好奇心を暖め続け、幸運に恵まれて初めて生まれる。しかも華々しい成果が生まれるのは、そのごく一部に過ぎない。

科学技術の面で、急速に世界の水準に迫っていた韓国は、その成功体験を基に、ますます「役に立つ研究」にシフトし逆に大混乱を起こした。例えば、ソウル大の黄禹錫教授のES細胞捏造事件のような研究に予算を集中し、好奇心ベースの雑多な予算を大巾にカットしてしまった。いわば遊びの精神を排除して一直線で成果を求めたが、ノーベル賞を対象とするならば自殺行為であった。その上、韓国は朱子学の国で、「理論」を教えてくれる「先生」に対しては、批判を抑制しないと生きて行けない。訳の分からない個人的な興味に没頭し、既存の権威に疑問を呈することなど、韓国では不毛の分野であった。

黒いエナメル塗りのピアノに写る「幼稚な観察」を褒めてくれた先生。そのことが、今の年齢に至るまで、私の好奇心を支えてくれたと思っている。

もうひとつ似た事例がある。新制中学の三年生の時であった。たまたま学級新聞を発行することになって、親から「ガリ版」を買ってもらった。へたくそな文字でA4版二ページが原則、毎月、出していたように思う。その内に、おそらく国語の先生の紹介で朝日新聞社の「学級新聞コンクール」に応募した。

もちろん入賞などするレベルのものではなかったが、審査担当者から「おほめの言葉」を頂戴したのである。ただそれだけのことであったが、それからは、新聞編集

が病みつきになり、高校でも大学でも新聞部の部室に入り浸っていて、ついには、朝日新聞の科学記者になろうと思ったほどであった。

だから数年前から続けている「史游会通信」の編集など、他のメンバーからは「ご苦勞なことに」と見られているかも知れないが、本人は意外に楽しんでいたのである。

幼い時に「ほめられること」、特に「好奇心」を鼓舞してくれたことは生涯の宝物。それは大人だって変わるまい。

まず、学ぶ前に自分で考える。考えて見て幼稚ではあっても「答」を出してから、回答を見る。それが「合っている」時の楽しさは醍醐味であり、次の問題に対して自信を生む。学んだ知識は時間と共に消えて行くが、自分で考え出した知識や理屈は、生涯忘れることがない。これが、私のやり方であった。

専門学者でもないのに、随分多くの論文を学会誌に載せた。「共著論文」を除いても約五十編あり、学会誌の名称を数えてみると二十誌以上になる。いかに多様な(種々雑多な)テーマについて好奇心の赴くままに、ひとりで行研究してきたかがわかるであろう。

現在の学界では、主要学会誌に「単著論文」が載るこ

などほとんどなく、最低でも指導教官と連名であり、時には十名以上の「共著論文」も珍しくない。そもそも「単著論文」が異例なのである。まして、同一人物が数多くの異なる分野に論文を載せることなど「有り得ない」のである。しかし、好奇心という次元で見れば、いずれも根っこは繋がっていて、いわば同じ分野なのであるが、他者からは「独創性」と評価される。

このような性向のため、勉強しなければできない英語が嫌いであった。本気で英語が零点でも入れる大学を探したほどである。小学校時代からの「乱読」の影響もあって、とにかく小説はもちろん歴史・地理、社会問題まで何でも読んでいた。多読は国語力を高めるし、講談に始まる歴史好きは、雑学的な社会科で一定以上の成績を取れる。その上、「自分で考える」理科や数学が好きで成績も良かったから、英語を軽視して過ごしても何とかかなると思っていた。それでも、高校卒業までには、何とかローレンスの『チャタレー夫人の恋人』を読破しようとする半分ほどまで読み終えたが、結局、進学は工科系を選んだ。

ここで、再びノーベル賞の話に戻る。

この十年間に日本人の受賞者は十一名いるが、その出身学校を見ると、東大と京大は合わせて二名なのに、い

わゆる地方大からは、山梨大、埼玉大、神戸大、佐賀大、長崎大と五名もいる。その上、日本のノーベル賞受賞者に共通するのは、みな幼少のころから「読書」に親しんできたことである。もちろん巨額な予算が支える「ノーベル賞プロジェクト」もあるが、日本には好奇心が支えた個人研究に秀でたものがある。

韓国では「陶工」が社会の底辺に位置付けられていたが、日本では名匠として上流階級と交流する機会があった。技術者としての道を究めるより、すぐに経営者になって指揮を執りたがる韓国人。韓国において、最も違和感があったのがそのことである。

時代の所為もあつたと思うが、新潟で四年間過ごした疎開生活が単に懐かしいばかりでなく、自分の人生行路を定めたとの思いがますます強くなっている。

いずれ、「小さなカボチャ」の成因を探る実験を行ってみたい。